

7、札幌）研究発表要旨

日本臨床教育学会員 安達尚男

以下は当日行った報告（実践事例研究～「共同農作業体験による新たな若者自立支援の試み」の導入部の一部を紙面の関係で要約して掲載するものである。

多様

化、深刻化する若者の実態。

1) 世界的に見ても深刻な日本の若者の実態。

最近のマスコミでもその「異常さ」は大変なものである。

- a) 日本の高校生の約7割が、「自分はダメ人間だと思っている」との報道もある。（9月8日北海道新聞夕刊）これは他の諸外国に比べても異常に高い比率とのことである。（同じ調査で、アメリカは45%、中国56%、韓国35%と報じられている。）
- b) また別の報道では、大学生の約3割近くが、「この1年間に自殺を考えた」と伝えている。別の統計では、日本の若者の死亡者の約半数は自殺によるものとされ、これは世界でも例を見ないものとされている。（G7の国際統計）

最近ビバハウスへの相談内容の傾向もまさにこの事実と照合するようなものとなっている。特に顕著なのは大学卒業後または卒業をまじかにしながら次へあゆみ出せない相談が集中しだしている事だ。これらのケースに共通している点は、何らかの社会不適合の反動として家にこもりがちになり、この状態をめぐり両親特に父親との関係が悪化し、親子断絶、一切の関係を拒絶してしまう事態に至り、長期の引きこもり状態に至ってしまうというものが大半である。

高校中退、不登校などの相談は、ほぼ過去と同じように継続しているが、最近急激に増えた「大学生問題」の急増には、日本社会の「教育」から「社会」への移行過程に新しい深刻な事態が起こりつつある予感がしないでもない。かつて生活指導関係者の中で「学生アパシー」などの言葉が使われた事もあるが、当時は、主に中・高校生レベルでの無気力症や不登校などに関して使われる事が多かったが、まさに最近の大学生の相談者や受け入れ者を見ると「大学生新受難時代」としか呼べない現象が起こ

りつつあるのではないかとの不安まで呼び起こされる。これはたまたま私たちがビバハウスで接したきわめて小数の実例に接して受ける実感なので、多数の大学関係者の関わる本学会で、是非とも包括的な調査、分析をお進め頂きたい。

ただし、直感的には、企業の求める人間像を最優先とする現在の文科省の求める教育の欠陥が来る所まで来てしまった感がしないでもない。教育を数量化し、効率のみを優先するあり方の結果、人と結びつく能力、いわば「人間力」ともよぶべき力が余りにも育っていない気がする。共同農作業などを通じてこの力を身につけた若者たちの見事な変貌を見るたびにその事を強く感じさせられている。